

明治期の日本の三大教育家といえ、福沢諭吉、新島襄に成瀬仁蔵の三名があげられる。そのうち成瀬は、日本女子大学を創設したことにより、高等女子教育に先鞭をつけたことが、これまでも評価されてきた(青木生子『今を生きる成瀬仁蔵』[2001])。だがそのアジアに対する影響には、近年まで日本国内では、必ずしも十分には注意が払われてこなかった。この側面に注目した中国社会科学院亜太研究所の陳陣教授の報告(日文研フォーラム第166回。平成15年11月11日、キャンパスプラザ京都にて)を参照して、日中女性史の一面に迫りたい。

成瀬は安政5年、現在の山口市の士族にして漢学の素養厚い、成瀬小左衛門の長男として生まれ、同郷の先輩であり、北米に留学して宣教師となった、澤山保羅[パウロ]に導かれ、大阪の浪速教会で受洗する。神の前の平等を謳うキリスト教への開眼が、成瀬を儒教的な女性観から脱皮させた、といわれている。とりわけ啓示となったのが、聖書の箴言三一に見られる言葉「誰か賢き女を見いだすことを得ん、その価は真珠よりも貴し」であったらしい。梅花女学校主任教師などを歴任したのち、成瀬は明治23[1890]年、北米に留学し、アンドーヴァー神学校、ついでクラーク大学に学び、女子教育の研究、

成瀬仁蔵(1858-1919)と何香凝(He Xiangning 1878-1972) 上  
日本女子大学から近代中国における女性解放へ

稲賀繁美  
国際日本文化研究センター・研究員  
総合研究大学院大学助教授

社会事業施設にいたる調査学生の一人となり、1919年研究に従事する。英文で『澤山保羅伝』を出版し、明治27年に帰国。その著書『女子教育』(1896)は楊廷棟、周祖同によって1902年に『女子教育論』として中国語訳が出版されるが、この著書に触発された中国女性の一人に、何香凝があった。その後中日友好協会会長、廖承志の母である。

1878年香港の資産家の家に生まれた広東人女性、何香凝は、1898年、廖仲愷と結婚、1903年4月、24歳で日本に留学し、1905年に孫文の中国同盟会に、初め女性会員として参加、1908年まで5年間在籍するがたわら、東

洋の間に、厨川白村の『近代京女子美術学校を卒業して』に、日本語力がまだ不十分だったこの中国留学生に、校長の成瀬は特別な配慮を払い、その教えに感化を得た旨、『人民日報』掲載の晩年の「回想録」(1961)に記している。「依頼により多くの人民の増加するの度に国家は益々衰微に傾く。」一生に一業を成就し、社会の公益をなかる」などの言葉が思い出される。帰国して辛亥革命(1911)に挺身した何は、中華民国成立後、袁世凱の権力を掌握とともに、1913年から16年にかけて、夫妻で日本亡命、その間、1914年には中華革命党に入党。1918年5月、日中軍事協定に反対して一斉帰国した中国人留

思  
考  
の  
隅  
景

の5.4運動勃発を故郷で迎える。24年には国民党中央執行委員、中央婦女部部長に選出され、中国における女性の地位向上運動に尽力する。この20年代前半、中国の文化運動は、未曾有の高揚期を迎えていた。文学に注目しても、1918年5月には雑誌『新青年』に与謝野晶子の「貞操論」が、魯迅の弟、周作人によって訳出。5.4運動の高まりのなかで、女性の地位向上、権利獲得に、先端の知識人が敏感には孫文の中国同盟会に、初関与した様子は、再評価に値する。1922年には、周建人『恋愛の意義と価値』と同誌『恋愛の自由と自由恋愛の討論』へと発展する。『ほば同時にプロレタリア文学に由来する階級意識も中国共産党の若い論客によって導入され始める。同じ日本留学組の郁達夫が『創造週報』1923年5月に「文壇における階級闘争」を発表、同号掲載の郭沫若「我々の新文学運動」も「無産階級の精神の爆発」を訴えるものだった。思潮は、個人解放から大衆の団結へと急速に動いてゆく(本段落の情報とは、劉建輝氏の韓国比較文学会国際学会会議での発表(11月7日)に依拠)。(以下次号)